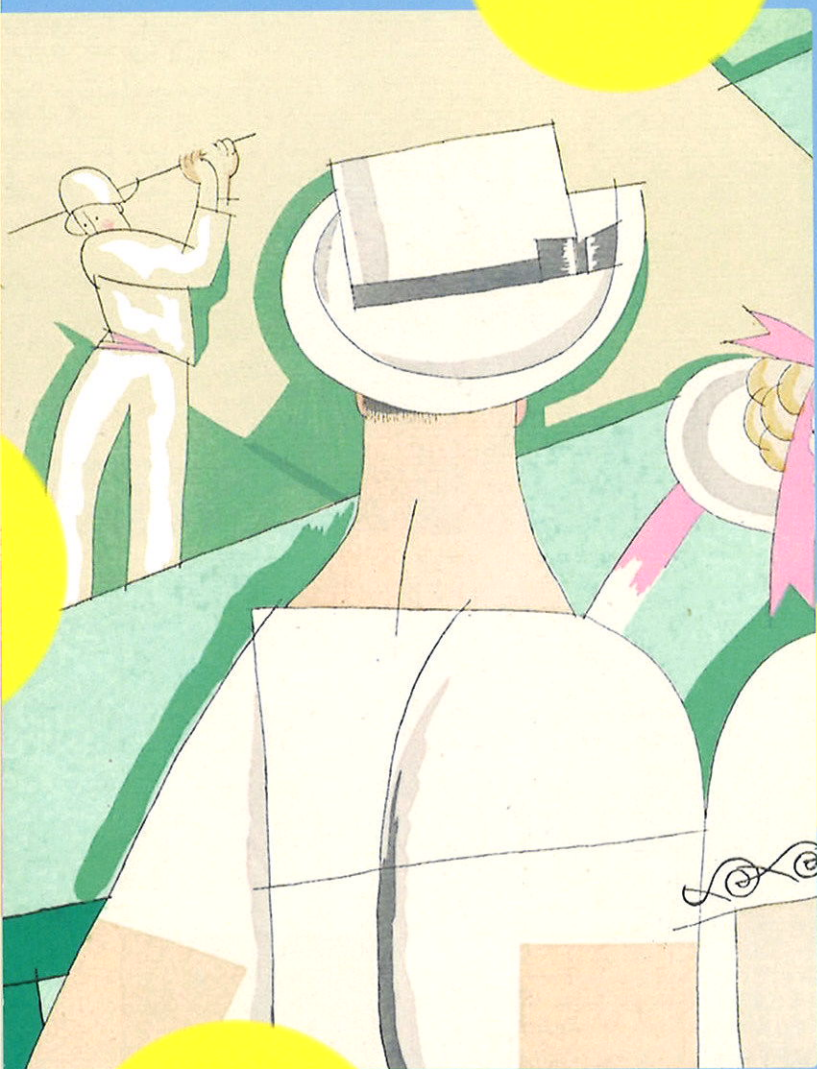


06

服をめぐる

衣服の研究現場より—京都服飾文化研究財団(KCF)広報誌



対談

幅允孝と語る

アール・デコの広告とポール・ポワレ

服をめぐる 06

一人一品

幅允孝（ブックディレクター）

『幅允孝と語る』

アール・デコの広告とポール・ポワレ」 p.3

地産街道をゆく⑥

和歌山 p.10

今日の補修室 第六回

パターンをとる p.14

KCI Wunderkammer

取付型ポケット p.15

PEOPLE

「春」にまつわる服の
思い出を教えてください。

p.16



一人一品

ゲスト

幅允孝

Yoshitaka Haba

Hitori Ippin

ブックディレクター

× KCI 収蔵品

Fuku wo Meguru

ファッションの未来
History of Fashion

幅さんは1976年、愛知県津島市生まれ。慶應義塾大学を卒業後、青山ブックセンターでの勤務を経て、株式会社ジェイ・アイに入社、石川次郎氏に編集を学ばれました。2005年に独立し、選書集団・BACH（バック）を設立。本をツールに選書、編集、執筆、本を用いた空間づくりなど幅広い分野で活動されています。

日々、世界中の新旧さまざまな本に触れる幅允孝氏。そんな幅さんが選んだKCIの収蔵品は、20世紀初頭に活躍したデザイナー、ポール・ポワレが編集した広告画集『PAN』。この書籍から幅さんは何を感じ取られたのでしょうか。

著名人が各々の目を通し、KCIの収蔵品を語る「一人一品」。今回のゲストはブックディレクターの幅允孝氏です。

本誌について

『服をめぐる』は、京都服飾文化研究財団(KCI)が収蔵する膨大な西洋服飾コレクションを手がかりに、服飾の歴史や文化を分かりやすくお伝えする小冊子です。文学者やアーティストからの視点、日本の伝統産業との関わり、研究現場からのレポートなど、さまざまな観点から服飾の世界にアプローチします。服をめぐる旅が今、ここから始まります。

京都服飾文化研究財団(KCI)とは

京都服飾文化研究財団(The Kyoto Costume Institute, 略称KCI)は、西洋の服飾やそれにかかわる文献資料を収集・保存し、調査・研究する機関として、1978年に株式会社ワコールの出捐によって設立されました。現在、18世紀から現代までの衣装など服飾資料を約13,000点、文献資料を約20,000点収蔵。それらを多角的に調査・研究し、その結果を国内外での展覧会(「モードのジャポニスム」展、「身体」展、「FUTURE BEAUTY: 日本ファッションの30年」展など)や、研究誌(『DRESSSTUDY』、『Fashion Talks...』)の発行を通じて公開しています。

Website <http://www.kci.or.jp/>



「FUTURE BEAUTY」展 ヒーボディ・エッセックス美術館(米国、2013年) ©2013 Peabody Essex Museum. Photography by Allison White



[対談]

幅允孝と語る アール・デコの広告とポール・ボワレ

幅允孝(ブックディレクター) × 筒井直子(KCIキュレーター)

筒井 本日はお忙しい中お越しくださいます。ありがとうございます。さて、私たち京都服飾文化研究財団(以下KCI)は西洋の服飾を研究対象にしていって、現在一万三千点の服やアクセサリーなどを収蔵していますが、他にも服飾関係の書籍や文献資料を数多く収蔵しています。第6回を迎える『一人一品』では、「選書のプロ」である幅允孝さんに、KCI収蔵の書籍から一冊を選んでいただき、それについてお話をうかがいたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

幅 よろしくお願ひします。

筒井 今回幅さんが選ばれたのは1928年に刊行された『PAN annuaire du luxe à Paris』という本でした。日本語に訳すと『牧神・パリ贅沢品年鑑』ということになりました。この頃、パリで活動していた服飾デザイナー、ポール・ボワレ(Paul Poiret [1879-1944])が編集した広告画集です。当時のパリの奢侈文化を代表する115店舗の広告が収録されています。まずはこの本を選ばれた理由をお教えいただけますか？

幅 以前、KCIに伺ったとき、書庫で本をたくさん見せてもらいましたが、中でもこの『PAN』にとっても興味を引かれたんです。この時代にこんな面白い編集の本が出版されていたんだって驚いて。

筒井 1920年代のパリというと、ピカソやコクトー、ディアギレフ、マン・レイなど錚々たる芸術家が活躍した時代でした。新たな美学や芸術がパリにあふれていた時代ですね。

幅 ポール・ボワレってコレセツトなしの服を作った人として有名ですけど、こ

の頃の彼ってファッション界では第一線で活躍していたんですか？

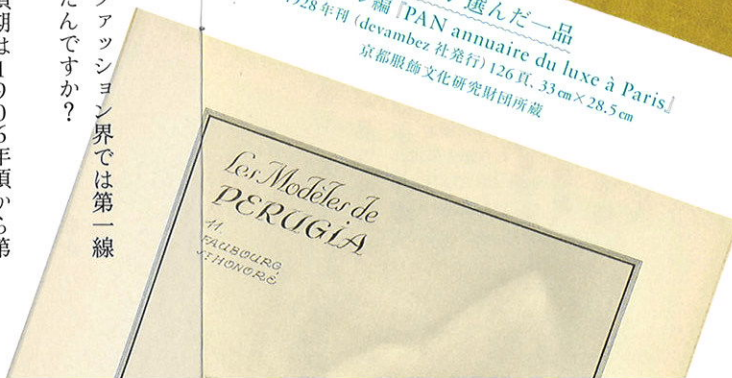
筒井 彼の絶頂期は1906年頃から第一次世界大戦が始まる1914年くらいまでで、1928年というのは必ずしも第一線で活躍、という時代ではなかったんです。彼は豪奢で華やかな衣装を好んだので、1920年代のシャネルの服に代表されるようなベージュや黒一色の簡素な服が受け入れられなかったんですね。シャネルの服について彼は「ポール紙に着せたような服」と酷評するんですけど、そういう態度が20年代の潮流に乗り切れなかった理由なのかもしれません。

幅 ボワレとしてはちよつと落ち目だった頃ってことですね。そんな時にこの本を出版した。

筒井 はい。実はボワレは服飾以外にもさまざまな分野のデザインを試みた人で、本を作ることにも早くから興味を示していたんです。例えば1908年、彼が自分の店を開いて5年後になります。が、ポール・イリーブというイラストレーターに自分の服を描かせて作品アルバムを作り顧客に配っています。写真集では



幅さんが選んだ一品
ポール・ボワレ編『PAN annuaire du luxe à Paris』
1928年刊 (devambez 社発行) 126頁、33cm×28.5cm
京都服飾文化研究財団所蔵





ノド部分は別の紙を用いて開けやすくしている



筒井 藤田はこの頃、すでにパリで画家として成功していましたが、こういう仕

幅 これ、藤田嗣治が描いたんですね。藤田じゃないくらい素っ気ないのがたまらないです（笑）。その場でちよつと描いたよ、みたいな雰囲気がありますよね。若いころの安西水丸さんみたいな。

筒井 はい。20年代にシャンゼリゼ通りに三菱の貿易関係のお店が開店しています。日本の絹や金属品などいろいろなマテリアルを扱っていたようです。

幅 これは、三菱ですか（図2）。

筒井 中には当時、先端メディアだったラジオの広告もあって、この時代らしさが出ています。

幅 これなんかはセンスがありますね（図1）。服飾デザイナーのマドレーヌ・ヴィオネの広告ですか？ フレームを文字で表しています。当時のデザインって余白恐怖症みたいなところがありますが、そういう時代において実に潔い。

幅 この本、紙と印刷の感じがいいですね。雑誌だともう少し薄い紙を使うのでペラリとした印象になるんですが、こういう厚手のマットな紙を使って、よくインクが染みこんでいる感じが好きです。それから、この厚さの本って、ノドの部分に負荷がかかるんですけど、それを軽減させるための、ノドの部分の部分を別の紙にして、折り目をつけて開けやすくしている。こうすれば本への負担が軽くなるし、かつ読者が見やすい。ある意味、親切設計。ボワレって顧客第一主義の優しい人だったのかも（笑）

筒井 調べたところによると、豪華版も出していたらしく、それは金ピカの表紙

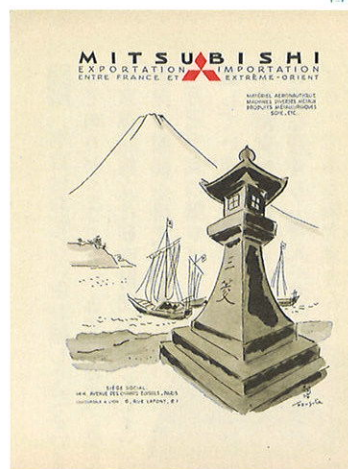


図2

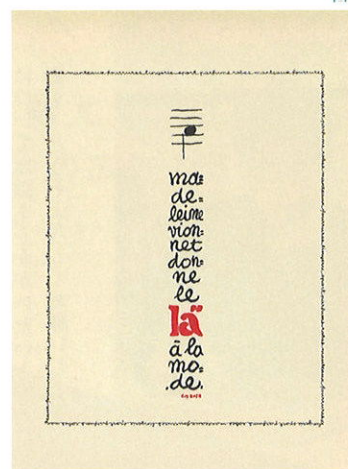


図1

本書掲載のボワレの肖像写真



筒井 そうですね。服飾のみにとどまらず、料理本も出しています。そして1928年に広告画集『PAN』を出版するんです。

幅 では、割と早い時期から出版に対するシンパシーみたいなものはあったわけですね。

筒井 そうなんです。いろんな人を集めて会議をして、編集を進めていったようです。ボワレはこの本に対して大きな自信を持っていて、自身の回顧録に『PAN』は当初狙っていた顧客だけでなく、芸術愛好家や愛書家にまで広がり、大量の部数が求められた。これはいつの日か再評価されて、雑誌の新しい典型の一つとなることだろう。」というふうに書いています。

多かったです。

「今も残っているお店は、この広告デザインをもう一度使ってもいいんじゃないかな・・・」(幅)

だったようです。

幅 金ピカ…(笑)。またボワレの人柄についてちよつと思つてしまいました。ボワレつて武將にたとえると秀吉タイプかも…(笑)

筒井 なるほど。彼は華やかなことをやって、みんなを驚かせたり楽しませたくつて仕方のないタイプなので、そういう意味で秀吉タイプなのかもしれません(笑)。実際、服飾デザインや出版の他に、香水を作ったり、インテリア会社や包装会社を立ち上げたり、いろんなことをやってるんですよ。しかも誰かに任せるんじゃない、あくまで自分が携わりたい。おかげでいろんなことにお金をつぎ込みすぎて、何度も破産しちゃうんですけど…。

幅 『PAN』の出版が1928年、翌年には世界恐慌が起きますよね。その時ボワレはどうだったんですか？

筒井 世界恐慌の時は破産してしまい、自分の財産を売り払います。でも、その後もめげずに頑張るんですね。百貨店のプランタンと契約したり、他社と共同で

仕事したり、映画衣装を作ったり。ただ、この頃にはもう50代になっていて、時代の波に乗り切れないまま、第二次世界大戦中の1944年に65歳で亡くなります。

幅 じっくり『PAN』を見てきました。が、この本からポール・ボワレっていう人のキャラクターが浮かび上がってくるようでした。まさに「本は人だ」って感じますね。

筒井 幅さんは世の中にある本を幅さんの視点でセレクトして、それを書棚に並べ直すことで、新たな意味を生み出すお仕事をしていきます。ボワレの仕事と幅さんのお仕事って共通点があるんじゃないかって感じるんです。

幅 そうですね。僕の場合は本が軸足ですけど、もう一つの足でどこまでピボットターンして、新しい世界に行けるかっていつも考えています。心の琴線に触れる何かがあったとして、それに対してどうしても反応せざるを得ない時、それに対する欲求に素直に反応するボワレに對

して共感というか、リスペクトする気持ちがありますね。

筒井 ただ、こういうアイデアいっぱいの人と一緒に、周りにいる人は振り回されっぱなしで大変だったでしょうね(笑)

幅 あんまり上司にはしたくないタイプですよ(笑)。振り回されてクタクタ。でも刺激的でおもしろい毎日かもしれせんね。

筒井 本日はありがとうございました。

この対談は2017年1月20日、ワコールスタディーホール京都にて行いました。

「ワコールスタディーホール京都」

さまざまな角度からとらえた多様な「美」をテーマに、スクール・ライブラリー・コワーキングスペース、ギャラリーなどを運営。ライブラリーでは幅孝孝氏が選んだ約300冊の書籍が閲覧できます(有料)。また、ライブラリーにはKCIの貴重書を展示する「KCI Mobile Library」を開設。6月30日まで『PAN』を展示しています。

<http://www.wacoi.jp/studyhall/>



KCIの収蔵品にみられる技法や素材を手がかりに、各地を訪れます。

和歌山

17世紀初期のジャケット

京都服飾文化研究財団所蔵
広川泰士撮影

青の絹糸と金糸、銀糸によるニット。様式化された葉の模様がヨコ編みによって編み出されている。袖部分が取り外された状態でKCIに収蔵された。

いま私たちが身に着けている服の生地は、大きく2つの種類に分けられる。織物と編物だ。織物とはタテ糸とヨコ糸を交差させて織っていく生地のこと。一方の編物は、主に1本の糸でループを作りながら生地を形成していく。編物というと、冬のセーターやカーディガンを思い浮かべるかもしれない。しかし、Tシャツや下着類、靴下も編物だから、私たちが編物を身に着けない日はおそらく一日もないだろう。

KCIが所蔵する最も古い編物の一つに、17世紀初期の西欧で作られた青いジャケットがある。光沢のある細い絹糸をベースに金糸、銀糸で植物柄が編み出された上質な逸品で、裕福な上流階級の人々が着たのだろう。豪奢かつ上品な風格が漂う。そして、その細かい編み目からは、棒針で丹念に手編みをした様子がひしひしと伝わってくる。一着を編み上げるのに、長い時間がかかったことは想像に難くない。一目、一目、編目を落とさないように。

西欧で棒針による編物が広がったのは14〜15世紀で、当初は帽子、手袋、靴下が主流だったといわれる。16世紀になると、イギリスで羊毛の靴下編みが農閑期の内職として奨励された。上質な羊毛の靴下は次第に他国にも輸出されるようになり、生産量の増大が求められた。そうした時代にイギ

リス人のウィリアム・リーによって考案されたのが、「ストッキング・フレイム」と呼ばれる靴下編機だった。この発明を機に、編物は生産面において飛躍的な進歩を遂げることになる。初期の編機とは一体どのようなものだったのだろうか。「ストッキング・フレイム」を原型とする19世紀の編機が全国の博物館等に数台、現存すると知り、そのなかのひとつ、和歌山市のフュージョンミュージアムを訪ねてみることにした。

和歌山城から北へ徒歩10分ほどの商業地域に、フュージョンミュージアムがある。館長の荻田正弘さんと館長代行の池田豊さんが出迎えてくれた。「和歌山は明治以降に繊維産業が発展しました。なかでもヨコ編みの編物は、昭和期に全国一の産地になったんですよ。」荻田さんによると、編物にはタテ編みとヨコ編みがあって、トリコットに代表されるタテ編みは福井がシェアをとり、和歌山はメリヤスといったヨコ編みの製品が主力になったのだという。館内に入ると、一台の古めかしい木製の機械が目に入った。「これがウィリアム・リーの編機を改良して作られた1830年代のものです。」編機の幅いっぱいにヒゲ針がズラリと並んでいて、これで一気に400目が編めるらしい。「この編機を操ることが出来るのは館長だけなんですよ。」と池田さんが促してくださり、荻田さんに実際その編機を動かして



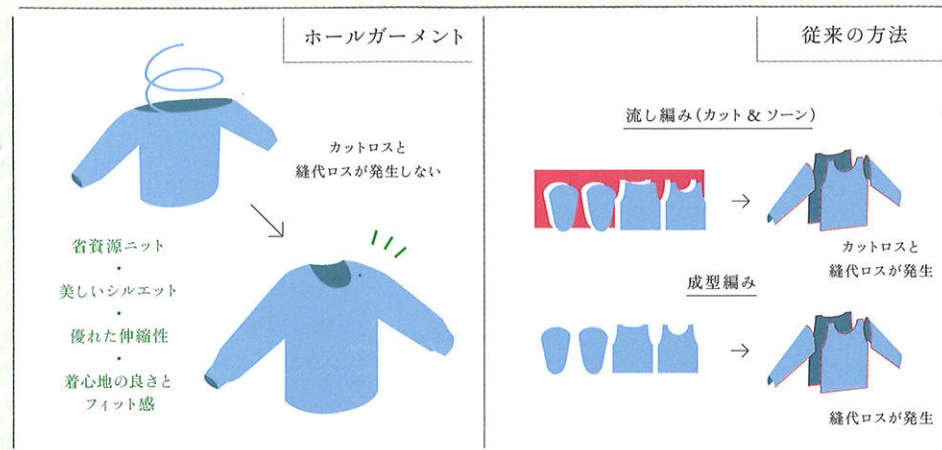
1830年代の編機を操作する荻田館長



1960年代、島精機製作所は世界に先駆けた自動編機を次々に開発した



工場で組み立てられた編機は世界中へ出荷されていく



高校時代(16歳)に島氏が開発した二重環かがりミシン



1995年に開発されたホールガーメント横編機

もらった。「チー」という軽い音をたてながらヒゲ針の上を糸が滑り、ものの2〜3秒で一段が編み上がる。驚くほどの速さだ。200年近く前の機械の速度に目を丸くしていると、「これを靴下にしようと思ったら、筒状に縫わないといけないでしょう。今度はそれを全て機械でやりたくなるわけですね。」と数田さん。19世紀の後、人々の開発への意欲は決して止まらない。

フュージョンミュージアムの母体は、編機製造会社、島精機製作所だ。現在ではコンピュータ制御によるヨコ編機の世界シェア、トップとして繊維業界では広く知られている。その本社ビルと製造工場がフュージョンミュージアムから南東へ4キロほどのところにある。総務人事部長の藤田紀さんと同部課長代理の松田伸浩さんに案内してもらった機会を得た。「島精機製作所は現在の社長、島正博が一代で築き上げました。これまでに様々な編機を開発してきましたが、島が高校時代(16歳)に作った作業手袋用の二重環かがりミシンが原点なんです。」フュージョンミュージアムで目にした小ぶりの1953年製の編機。それは戦後、内職で手袋を編んでいた母親の作業を少しでも軽減できればと、島氏が開発したものだ。会社を興した1962年から今までに島氏が世界に先駆け開発した編機は数知れない。松田さんに製造工場を案内してもらった。広大な建物のなかに整列した機械が遠く先まで続く。「これがホールガーメント横編機です。無縫製型の編機として開発しまし

た。縫い目がなく、一着まるごと立体的に編み上げることが出来ます。」従来の製法では、袖付けや脇の縫製に手間がかかったり、裁断後の残り生地廃棄など様々なロスがあった。それを無くすためにはどうすればいいのか。島氏や社員たちの開発が陽の目をみたのは1995年のことだった。KCI所蔵の袖が外されたジャケットは縫い代の始末に苦心の跡がみられる。そうした様々な問題を解消しようと、世界各地で脈々と続けられた編機の開発が、数世紀を経た和歌山の地でひとつの実を結んだのだ。今日では、ブラダやシャネルといった有名ブランドの服が島精機製作所の編機から数多く生み出されている。

ホールガーメント横編機から編みあがったものを手に取る。機械編みとは思えないほどの柔らかさや繊細さがそこにあつた。空気をはらみながらふつくと柔らかく体を包み、動きになじむ。編物の魅力のひとつは、そうした心身が求める心地よさにある。それは、400年前も今も、そして未来も変わらないだろう。

(取材文、写真・筒井直子)

取材にご協力頂いた企業・団体(敬称略)

フュージョンミュージアム

和歌山市本町2丁目1番地 フォルテワジマ3階
開館時間…午前10時〜午後7時(入館受付は6時半まで)
休館日…1月1日・3日
問い合わせ…073-488-1962

株式会社島精機製作所

<http://www.shimaseiki.co.jp/>

珍品奇品も数多いKCIの収蔵庫
そこはまさに「驚異の部屋」。



取付型ポケット

素材：麻、綿、絹糸 大きさ：縦39.5cm、横25.5cm
製作地：西ヨーロッパ 製作年：1770年代

18世紀の貴婦人は何を持って出かけたのか。ハンカチ、手袋、扇、ラブレターとか…。きっとあれこれあったに違いない。ところが当時のバッグはとにかく小さく、ドレスにはポケットがなかった。ならば、ということで重宝されたのがこうした取付型ポケットだ。下着の上から腰に巻き、ドレスの下に忍ばせた。モノを取り出すときはドレスのウエストにあるスリットから手を入れて、ポケットの口を探る。この愛らしい草花柄刺繍のポケットは意外に大きく、たくさんのモノが入っただろう。女性の持ち物はいつの時代だって多いのだ。(筒井)

KCI
Wunder-
kammer

今日の補修室

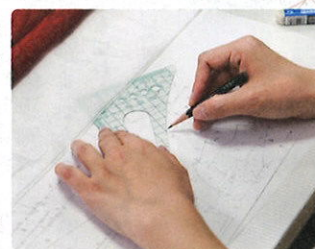
TODAY'S
RESTORATION
ROOM

第六回

パターンをとる



パターン（型紙）は服を作る際に使われる図面で、いわば服の設計図。このパターン通りに生地を裁ち、縫い合わせることで、平面の生地から立体の服が立ち現れてきます。しかしKCIの補修室では、通常の服づくりの工程とは違い、収蔵品の衣装を採寸してパターンを製図する作業が行われます。このパターンをとることによって、時代ごとの衣装の特徴や、デザイナーごとの服づくりの特徴など、様々なことが明らかになります。



まず、衣装を平置きし、生地の地の目に沿って糸で方眼状のガイドを作ります。そして、それらを基準にしてメジャーで衣装を採寸していきます。必ずしも状態のよい衣装ばかりではないので、衣装を傷つけず、負荷をかけないように細心の注意を払って採寸していくのはもちろんのこと、見えない部分のパターンは衣装をほどかずに採寸値から推測して製図していくのも、KCIならではの作業かもしれません。最後に5分の1サイズでパターンを清書して完成です。

これらのパターンは衣装研究のために用いられったり、出版物に掲載されたり、あるいはレプリカ製作のために使用される大切なKCIの財産の一つとなっています。(福岡)

宮内真理子

Mariko Miyachi



パナソニック 沙羅ミュージアム学芸員。携わった展覧会は「ウィーン工房1903-1932」(2011年)、「モードとインテリアの20世紀展」(2016年)など多数。 <http://panasonic.co.jp/es/museum/>

春の装いというと、私が幼少の頃に母が身に着けていた重色のコサージュをいつも思います。卒園式や入学式の会場で、他のどのお母さんが付けているのとも違う、凛としてミステリアスな花のコサージュとそれを付けた母を眺めることが好きでした。おそらくこの時が、装身具と個人が相まって個性や魅力をつくることを知った最初のお母さんだと思います。先日母にそのコサージュについて聞いたところ、友達の手作りの逸品でした。きっと、そのことも母によく似合っていた理由の一つなのでしょう。

篠崎友亮

Tomoaki Shinozaki



photo by Takuji Nishida

ファッションスタディーズ主宰。IFIビジネススクール卒業後、ファッションの企業に入る。現在、ファッションを体系的に学ぶ場と強度のある情報を発信する媒体を企画運営している。

ファッション業界にいと季節がずれてくる。春服の発表時期はメンズが6月で、レディースが10月(いずれもパリ)。春物をオーダーするのが夏秋の半年前、届くまでのドキドキ感もあるし、こんな頼んだっけ?ということもある。けれど、今や、ショーはネットでリアルタイムで見られるし、SNSで瞬時に情報が拡散される時代。See Now, Buy Nowという季節のずれをなくす動きも起こっている。先取りのドキドキ感か?今すぐ着るという満足感か?僕のなかでも気持ちは揺れている。

内村理奈

Rina Uchimura



日本女子大学准教授。専門は西洋服飾史。著書に「モードの身体史 近世フランスの服飾にみる清潔・ふるまい・逸脱の文化」(悠書館、2013年)など。

はるあけぼの……そう言えば、あけぼの色の着物を一着持っている。淡いオレンジ色のような、桃色のような、薄い銀のややもかかっているかのような、微妙な色合いの大切な一着。昔、祖父母が京都でいい白生地があったと言って、この色に染めて仕立ててくれた。天蚕の糸を使っているという。ヤママユガの薄緑色の蚕から生まれる糸がこんな色になるなんて。友達の結婚式の時などに着ていたけれど、今度は春爛漫の特別な日に、自分のために着てみたい。

服をめぐる

「服をめぐる」衣服の研究現場より 第6号
2017年3月27日発行(年3回発行)

発行:公益財団法人 京都服飾文化研究財団(KCI)
〒600-8864 京都府京都市下京区七条御所ノ内南町103
電話:075-321-9221

ウェブサイト: <http://www.kci.or.jp/>

編集:筒井直子、福岡英城(京都服飾文化研究財団)

デザイン:坂田佐武郎

写真:成田舞、筒井直子

表紙写真:シャルル・マルタン(絵)、エリック・サティ(音楽)

「Sports & Divertissements(スポーツと気晴らし)」(1914年)より

「ゴルフ」(部分) 京都服飾文化研究財団所蔵

編集後記

歴史ファンならずとも、幅広い層に人気がある幕末〜明治時代。西洋文明が流入し、国のあり方が模索された激動の時代でした。そんな時代の人々の装いや芸術作品の数々が今春、横浜美術館でご覧いただけます。この「ファッションとアート 麗しき東西交流展」ではKCIが長年、収集と研究を続けてきた西洋ファッションにおけるジャポニスム(日本趣味)の名品を一挙公開します。会期は4月15日(土)~6月25日(日)、休館日は毎週木曜日と5月8日(月)です。また、練馬区立美術館では「19世紀パリ時間旅行―失われた街を求めて―展」が4月16日(日)~6月4日(日)に開催されます。ここではKCIより19世紀の豪華な衣装6点を貸し出し展示します。絵画や衣装を通して、19世紀のパリの街をさよってみませんか?こちらは毎週月曜日が休館です。今春、時空を超えた服をめぐる旅にぜひ出かけください!